



正しく生きたヤコブにとって危機にあっても、ラバンには堂々と自らの立場を主張することができたヤコブも、犯した罪の清算ができていなかったエサウに対しては良心の呵責のゆえにいわれのない恐怖と臆病風に取りつかれていました。二つの陣営の分岐点「マハナイム」に至り、神の軍勢に守られている領域に入ったことを目で見て分かちながら、それでもまだ、神が守り導くといわれた約束に全信頼を置くことができず、依然として罪の意識と絶望感に襲われていたヤコブに必要なのは、霊の覚醒でした。命拾いの策略の中でヤコブは、まず、自らの財産、家畜を自分より先に行かせる決意をし、次に家族を、召使から始めて、最後には寵愛の妻ラケルと寵愛の末っ子ヨセフをも含め全家族を先に行かせたのでした。しかし、一人最後に残った自分を捨てる決断には至っていませんでした。神との格闘の出来事が起こったのは、ヤコブがこのように自分を捨てきれない状態にあったときです。

自分の人生や計画を自分自身が決意、支配することばかりを考え、そのように実践してきたヤコブが、突然現われた敵と格闘しているうちに気づかされたのは、自分が敵に回していたのは、実は神であったというショッキングな認識でした。冒頭に上げたくだり興味深いのは、近づき格闘を始めたのは神でヤコブではなかったということ、ヤコブが肉体的にも霊的にも服従するまで神は格闘を終えなかったということです。危機にあっても神を真剣に求めることのなかったヤコブも、神を必要とする者を日夜求めておられる神ご自身が近づいてくださったことによって、自らの弱さ、無力さに気づき、神の祝福以外に力の源がないことを知らされ、ついには自ら神の祝福を求める者に変えられたのでした。最初のうちは自分の力、やり方で格闘していたヤコブが、ももの関節がはずれ自らを支える力が奪われて初めて、神にすがる以外すべがないことに気づいたように、祝福の源が神であることを知るようになるために、体の一部の機能を失わなければならないことがあるのです。この日以来ヤコブは歩行に障害をきたすことになるのですが、肉体の障害は神に服従することを学び、神の人としての新生の人生を歩み始めることになるヤコブの体に刻まれた、神を得た勝利のしるしとなったのでした。このときヤコブと格闘した神が受肉前のキリストであったことにほとんどの学者が合意していますが、キリスト信仰とは、全身全霊でキリストに信頼し、従うことなのです。

神はこのとき、ヤコブを新しい名「イスラエル」と命名されましたが、多くの注解者がその意味を「彼が神と格闘する」とか、「彼が神に勝つ」とヤコブを主語にして解釈しているのに対し、上述の雑誌記事のように、文法的に正しい解釈は「神が支配される」、「神が打ち勝たれる」であり、イスラエルは「勝利の神」の意味とするユダヤ教の解釈の方が正しいのです。勝利の神ヤーウェがアブラハム、イサクの子孫である神の民に約束されたことが、エサウではなくヤコブの子孫を通して成就することをご計画されたのは神ご自身でした。ヤコブが長子の特権を奪い、父の祝福を奪ったことによってエサウに追われ、止むを得ず、心細い思いでカランへの旅に発ったときすでに、途上のベテルでヤコブに示された啓示にそのことは語られていました。「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしはあなたが横たわっているこの地（カナン、今日のパレスチナ）を、あなたとあなたの子孫（複数形）とに与える。あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫（単数形であることからユダヤ人の王として生れるメシヤ、主イエス・キリストのこと）によって祝福される。見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」（創世記 28：13-15）。先のことも後のこともすべてを見通しておられる全知全能の神が、ヤコブを神の器として立て上げるために、色々な試練を通してヤコブの人生にご介入されたことは明らかで、このように神は御用のために、初めから完璧な器を選ばれるのではなく、むしろ不完全な者を選んで器へと変えてくださるので

す。今日、中東では一ヶ月続いたイスラエルとレバノン紛争の調停に国連や主要国が乗り出していますが、ヤコブの子孫ユダヤ人とエサウの子孫アラブ人との関係、カナンしぎょうの地の嗣業の問題、地上のすべての民に祝福をもたらす方の正しい認識など根本的な問題が解決、清算されないかぎり、そして何より肝心なことは聖書が証しているように、神ヤーウェの契約の民イスラエルが反逆の罪を悔い改めて神ご自身に立ち返らないかぎり、紛争は調停されても解決されることはないでしょう。それどころか、エゼキエルが預言しているように「ゴグ・マゴク」の戦いが勃発し、ヨハネの黙示録他、預言書が預言しているように、ついには、「ハルマゲドン」の戦いへと導かれていくことでしょう。その間に、偽預言者、偽教師、「反キリスト」といわれる最後の偽キリスト（偽救い主）が現われ人々を惑わし、多くが天災、人災等災いに巻き込まれ、真理は憎まれ、真のキリスト者、真のユダヤ教徒は迫害されますが、アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、ダビデ、エレミヤを経て、イスラエルの民に顕された神の約束が成就するには、これらすべてのことがまず起こらなければならないのです。メシヤなるイエス・キリストがユダヤ人の王として地上に戻ってこられないかぎり、カナンしぎょうの地をイスラエルが支配し、地上の諸国民が祝福され、永久の平和を楽しむことはできないのです。